

自立への「懸け橋」を

18歳 守ってくれる場所なくなる

ひだまりを求めて

養護施設を出た若者たち ①

雨が降る夜、ずぶぬれの男性が鳥取市の「ひだまり」の事務所を訪ねてきた。「相談があります」。表情は切迫していた。

男性は児童養護施設で育った。施設を出た後、住み込みの仕事に就いたが給与目当ての家族に悩まされた。不況で仕事を失い、暴力を振るわれていると訴えた。中嶋進一さん(35)は弁護士とともに仲介に入り、男性が家族から自立する手助けをした。

児童養護施設の子どもは18歳を迎えると施設から出るのが決まりだ。家族の元に戻れなくても、住む場所と仕事を自力で見つけなくてはなら

ない。「施設にいる時は児童相談所に頼れるが、施設を出た途端、守ってくれる場所がなくなる」と中嶋さんは言う。「ひだまり」はそんな若



相談者について報告する中嶋進一さん(右)。今後の対応について話し合う。鳥取市立川町5丁目

借家保証人・不況下の職探し…

者を支援する団体だ。中嶋さんは理事長を務めている。

公共職業安定所の職探しに付き添い、生活保護の申請を手伝う。保証人がいなくて家が借りられない場合には一時的な保護も担う。2008年に事務所を構えて以来、約130人の自立を支えてきた。今は吉田信彦さん(37)、山中捷二さん(69)と手を携えて運営する。

中嶋さん自身、生後間もない頃から18歳まで乳児院と児童養護施設で暮らした。施設を出た後、鳥取市内で住み込みの調理の仕事に就いたが、人間関係がうまくいかず3カ月で辞めた。アパート契約時の保証人に困り、親族や児童養護施設の園長に頭を下げた。

新聞配達、材木屋、瓦職人、派遣社員。仕事を転々とした。鳥取市の2DKのアパートには、施設を出たものの住む場所に困った後輩が寝泊まりした。多い時は3人で暮らし、長い人で1年ほど居続けた。仕事があるうちは何とか生活できるが、共倒れする危うさと隣り合わせだった。

そんな折、かつて暮らした鳥取子ども学園(鳥取市)の藤野興一園長から「『ひだまり』のスタッフにならないか」と誘われ、「施設を出た

人と社会をつなぐ懸け橋になりたい」と加わった。中嶋さんは「自分が退所した当時より仕事がない。支援の手がもっと欲しい」と訴える。

厚生労働省によると、全国の児童養護施設に約3万人がいる。半数以上は育児放棄や暴力といった虐待を受けた経験がある。全国児童養護施設協議会の副会長も務める藤野園長は「心の傷が治らないまま施設を出ることもある。自立が難しいケースはこれまで施設職員が個人的に抱えていた」と打ち明ける。

施設を出た後の支援は厚生労働省が08年度からモデル事業として乗り出した。「ひだまり」はその一つ。10年度からは退所児童等アフターケア事業として石川や栃木でも始まったが、厚労省の報告書は「果たす役割について、自治体や関係機関の理解が進んでいない」と指摘。運営団体や利用者の声を通し、事業の必要性をPRしたいという。

◆ 昨年末以降、「タイガーマスク運動」で注目を集めた児童養護施設。頼れる家族がいらない中で自立を迫られる子どもたちの支えは貧弱だ。「ひだまり」を通して現状を伝える。(西村圭史)